

自己統制感, 自尊感情および不安が問題認識過程に及ぼす効果—行動規範の決定過程に関する研究(1)

著者	桑原 尚史, 森上 幸夫, 西迫 成一郎
雑誌名	情報研究 : 関西大学総合情報学部紀要
巻	14
ページ	13-33
発行年	2000-12-21
その他のタイトル	The Effects of 'Locus of Control', Self-esteem and Anxiety on the Criterion of Behavior : A Study about the Determination Process of Criterion of Behavior
URL	http://hdl.handle.net/10112/6797

自己統制感，自尊感情および不安が 問題認識過程に及ぼす効果

— 行動規範の決定過程に関する研究(1) —

桑原 尚史 森上 幸夫 西迫 成一郎

要 旨

本研究においては，問題解決空間の規定因をみいだすことを目的として，問題解決空間と，不安，Locus of Control，自尊感情，そして行動規範，それぞれの関係性を分析した。その結果，不安と行動規範，不安と問題解決空間，行動規範と問題解決空間との間に強い関係があることをみいだした。

The Effects of “Locus of Control” , Self-esteem and Anxiety on the Criterion of Behavior

— A Study about the Determination Process of Criterion of Behavior —

Takashi KUWABARA, Yukio MORIKAMI, Seiichiro NISHISAKO

Abstract

In the present study and the following paper in this series, we propose to examine the determination of the process of criterion of behavior. The purpose of this study is to examine the interrelationship among personal characteristics and the recognition of problems to solve. Investigation is carried out by using 160 undergraduate students. The results suggested that the factors of anxiety, locus of control, self-esteem and criterion of behavior influenced the recognition of problems to solve.

1. 問題の所在

我々は、常に何らかの問題に直面している。その問題には、“今日の夕食を何にするか”といった日常の生活上の些細な問題から、能力や性格といった自己の有する諸特性に関わる問題、さらには“いかなる職業を選択するか”といったいわば人生の選択に関わる問題に至るまで、その重要性なり解決の困難さは異なれど、種々のものがある。そして、我々はそれらの問題を解決すべく行動している。したがって、我々の行動の背後には何らかの解決すべき問題が存在しているとみることができる。それ故に、我々の行動は、すべて、問題解決行動と捉えることができよう。

それでは、一体、われわれはどのような事柄を問題として捉えているのだろうか。この点に関して、森上・西迫・桑原（1998）は、個々が解決すべきと考えている問題群を問題解決空間と呼び、この空間がいかなる問題より構成されているのかについて次のような調査を行っている。彼らは、まず、男子26名および女子26名の計52名の大学生を調査対象とし、現在どのような問題を有しているのかを自由記述させ、大学生が有している問題を160種類収集している。彼らは、次に、その160種類の問題を、男子25名および女子25名の計50名の大学生に呈示し、それらの問題を有している程度を0から6の7段階で評定させ、平均評定値3.00以上であった82項目を質問項目として、男子178名および女子178名の計356名の大学生を被験者として用い、それらの問題を有している程度を評定させている。そして、その評定値を用いて、主因子法による因子分析を行っている。その結果、彼らは、性格領域問題因子、対人的領域問題因子、知的領域問題因子、日常生活領域問題因子という4つの因子を抽出している（Table 1）。

I) 性格領域問題因子とは、主に、自己の性格特性や行動傾向に対するネガティブな評価を示す項目から構成される因子である。

II) 対人的領域問題因子とは、対人的相互作用場面における自己の行動に対するネガティブな評価を示す項目より構成されている因子である。

III) 知的領域問題因子とは、自己の知的能力あるいは知的活動に対するネガティブな評価を示す項目より構成されている因子である。

IV) 日常生活領域問題因子とは、日常の生活空間を構成する要素に対してネガティブな評価を示す項目より構成されている因子である。

すなわち、問題解決空間は、性格領域、対人的領域、知的領域、および日常生活領域における問題群より構成されるというのである。

もちろん、この結果は調査対象となった被験者数、またその年齢からみても、直ちに一般化するものではないが、彼らが知的領域問題因子と命名している問題を除いて、年齢あるいは立場に関わらずかく問題を抱えていることは十分納得しうるところである。知的領域問題因子に関しては、確かにその内容は知的な活動に関係する項目より構成されているが、調査対象が大学生に限定されていることを鑑みて、この因子を自己に課せられている課題に関係する問題群と解釈し、課題関連因子と命名するのであれば、森上・西迫・桑原（1998）が提出した問題解決空間の因子

構造は普遍性を有していると解釈することもできる。たとえば職業的な役割を有している個人であれば、この因子は自己の役割を遂行するのに障害となる問題群より構成されるというわけである。しかし、たとえこの構造を一般化しようとしても、誰しもが同一の問題を有しているわけではない。問題解決空間を構成する問題群、またその多寡も個人によって異なり、そして、その間

Table 1. 「問題解決空間」に対する因子分析の結果 (森上・西迫・桑原, 1998)

因子	項目番号	項目内容	因子負荷量	
I 性格領域問題因子	9	思いやりがないこと	.763	
	38	情緒不安定であること	.720	
	30	性格が良くないこと	.691	
	5	人の気持がわからないこと	.675	
	13	すぐにイライラすること	.660	
	8	常識がないこと	.605	
	33	人の悪口を言ってしまうこと	.523	
	4	無気力であること	.518	
	26	自制心が弱いこと	.467	
	39	怠惰であること	.463	
	7	学部の内容が期待と一致しないこと	.444	
	36	大学生活に価値を見いだせないこと	.435	
	II 対人的領域問題因子	18	人見知りをする事	.800
		17	異性とうまく話せないこと	.783
15		社交的でないこと	.694	
24		人前でうまく話せないこと	.689	
12		消極的であること	.676	
40		人とうまくつきあえないこと	.675	
10		行動力がないこと	.565	
37		自分の意見が言えないこと	.500	
19		人から好かれないこと	.486	
25		人から良い評価をされないこと	.451	
3		恋人がいないこと	.438	
III 知的領域問題因子	22	授業が理解できないこと	.679	
	35	成績が良くないこと	.590	
	32	試験に関する情報がないこと	.569	
	6	試験の準備ができていないこと	.560	
	2	授業の勉強をしていないこと	.530	
	31	レポートの書き方が分からないこと	.527	
	11	新聞を読んでいないこと	.455	
	20	知的でないこと	.373	
IV 日常生活領域問題因子	27	疲れていること	.743	
	28	体調が悪いこと	.615	
	1	睡眠不足であること	.554	
	29	電車・バスが混んでいること	.518	
	34	通学に時間がかかること	.508	
	16	すぐ疲れること	.498	
	14	自由な時間がないこと	.430	

題をどの程度重要であると、また深刻と考えているかといった問題に対する認識にも当然差がある。また、たとえ直面する状況が同一であっても、その状況を問題と認識するかどうかは個人によって異なる。さらには、問題を認識していたとしても、それらすべての問題に対して解決の努力が払われるわけではない。それでは、これらの問題が認識され、そしてその問題に対して解決行動が採られるに至るまでには、どのような処理過程が機能するのだろうか。

問題解決過程は、問題を認識する過程と、問題を解決する過程に分けることができる。そこで、ここでは、問題がいかに認識されるのか、その過程について考えてみる。問題の認識が形成されるための1つの要素は、森上・西迫・桑原（1998）の調査結果からも明らかのように、自己の行動なり特性、また自己を取り囲む状況に対するネガティブな評価である。このような評価がなされるには、それに先立ち自己の何らかの側面に注意を向ける（self-focused attention）という処理が機能する必要がある。すると、いかなる問題が認識されるのかは、まず、自己のいかなる側面に注意が向かうかに強く依存することになる。自己に向かう注意の方向性には、Buss（1980）が指摘するように、自己の内的側面（private self-consciousness）に注意が向けられるのか、それとも自己の外的側面（public self-consciousness）に注意が向けられるのかといった、また、James（1892）が指摘するように、自己の能力や性格等の精神的な側面（spiritual me）に注意が向かうのか、自己が社会の中で他者の中でどのように認識されているのかといった社会的な側面（social me）に注意が向かうのか、それとも自己の身体、衣服また所有する財産等の物質的な側面（material me）に注意が向かうのか、さらには、Bracken（1992）が指摘するように、他者との関係性に関する側面、自己の能力に関する側面、自己の感情状態に関する側面、自己の学業成績に関する側面、自己の家族関係に関する側面、そして自己の身体的魅力や身体的特性に関する側面といった方向性を想定することができる。

さて、自己の何らかの側面に注意が向けられたとしよう。すると、次に機能すると考えられるのが、自己を認識し評価する処理である。Trope（1983）は、自己査定理論（self-assessment theory）において、人は自己の能力的特性や性格特性を正確に知りたいという欲求を有していると述べている。すなわち、本来、我々は自己を認識し、評価しようとする欲求を有しているというのである。それでは、我々は、それをどのように認識しているのだろうか。Bem（1972）は、自己知覚理論（self perception theory）において、人は他者から自己を知るのだと主張し、その際、手がかりとなるのが自己と他者との差異性、すなわち自分と他者との違いであると述べている。この点に関して、Festinger（1954）は社会的比較理論（social comparison theory）において、人は物理的・客観的な基準がない場合に、他者との比較を行うのだと述べている。そして、その比較は、社会的比較理論によれば、類似した他者となされるという。すると、自己をいかに認識し、評価するかは周囲にいかなる他者が存在するかによって異なってくるといえる。

それに対して、Duval & Wicklund（1972）および Wicklund（1975）の提唱した客体的自覚理論（objective self-awareness theory）、またその精緻化を試みた Carver（1979）および Carver & Scheier（1981）の制御理論（control theory）は、人はそれぞれ適切さの基準（standards of

correctness) を有しており、自己の行動に対する評価はこの適切さの基準に照合されて決定されると主張する。さらに、この基準は単一ではなく、上位の基準と下位の基準と2つの基準があると想定するのが、Higgins (1987) が提出した自己不一致理論 (self-discrepancy theory) である。自己不一致理論に従えば、我々が自己を捉える視点には3つの視点があるとされる。1つは、前項において解説してきた現在の自己の状態を捉える視点である。自己不一致理論は、これを現実自己 (actual self) と呼ぶ。2つめの視点は、自己の理想像を認識する視点である。自己不一致理論は、これを理想自己 (ideal self) と呼ぶ。3つめの視点は、自己の果たすべき最低の基準を認識する視点である。自己不一致理論は、これを義務自己 (ought self) と呼ぶ。そして、誰しも、現実自己が義務自己を上回るように行動しようとし、また少しでも現実自己が理想自己に近づくように行動しようとするというのである。しかしながら、ときには現実自己が義務自己を大きく下回る事態も生じ、また現実自己が理想自己と大きくかけ離れているといった事態も生じるだろう。自己不一致理論は、この現実自己と理想自己のずれ (discrepancy)、また現実自己と義務自己のずれを問題とする。

まず、現実自己と義務自己とのずれについてみてみると、たとえば、現実自己と義務自己とが一致している場合は、それは当然のことと受け止められるだろう。また、現実自己が義務自己をはるかに上回っている場合は、そこには、安心といった感情が生じる。ところが、現実自己が義務自己を下回っている場合には、不安や緊張といった感情が生起し、そして、その事態を何とか改善しなければと考え、行動に変化が生じることとなるというのである。次に、現実自己と理想自己とのずれについてみてみると、たとえば、現実自己が理想自己と一致した場合には、そこには幸福であるとか、満足といった感情が生じる。また、現実自己が理想自己を若干下回っている場合には、希望であるとかくやしさが生じ、現実自己を理想自己にさらに近づけるべくより一層の努力がなされることだろう。それに対して、もし現実自己が理想自己をはるかに下回っている場合には失望、悲しみそしてあきらめといった感情が生じ、その両者を近づける努力はなされない確率が高い。

このようにみれば、個人が自己に対してどのような理想像を描いているのか、どのような義務自己を有しているのか、そして現実自己をいかに捉えているのかによってその個人の行動が規定されると考えることができる。さらに、それらの基準と自己の行動なり自己の置かれている状況が照合され、その不一致の程度が喚起される感情を規定し、その感情が問題の認識、さらには問題解決行動を促進したり、抑制するのである。すなわち、自己の行動なり状態の望ましさを判断する基準として、理想自己という基準と義務自己という基準の2つの基準があり、それがいかなる基準であるかによって問題の認識が異なってくるのである。

しかしながら、我々は自己を正確に認識しているわけではない。Swann, Stein-Seroussi & Giesler (1992) は、自己確証理論 (self-verification theory) において、人は自己概念や自己評価を確証する社会的現実を求める傾向があると述べている。すなわち、人は自分が自己に対して抱いている認知や印象と同じように自己を認識あるいは評価している。さらにはそのように自己

を扱ってくれる他者および集団を求めているというのである。また、Tesser (1984) は、自己評価維持理論 (self-evaluation maintenance theory) において、我々は、一定以上の自己評価を保とうとし、それ以下に自己に対する評価が低下しようとするのを防止しようとする傾向があることを指摘している。また、これまで、自己と不適合な情報に対しては抵抗が生じること (Markus & Wulf, 1987)、自己に対する認識を確証 (self-verification) する情報にはより多くの注意を向け、その情報をより深く処理すること (Swann, 1983)、自己にとって望ましくない情報を回避する傾向があること (Greenwald, 1980)、さらには自己の行動を解釈する際、その原因を自己防衛的に (ego-defensive attribution)、また自己に都合よく解釈する (self-serving attributional bias) 傾向があること (たとえば Zuckerman, 1979)、自己高揚 (self-enhancement) 欲求あるいは自己防衛 (self-defense) 欲求が強まると下方比較 (downward comparison) がなされること (Wilson & Benner, 1971; Friend & Gilbert, 1973)、適切さの基準への適合 (matching-to-standard) が不可能であるという結果の予測 (outcome expectancy) がなされると、自己注目の回避 (avoidance) が行われる (Carver, 1979) ことがこれまで報告されている。これらのことから、我々が自己を認識しようとする際には、自己を正確に認識しようとする力と、自己に対して有している認識を保とうとし、なおかつ自己に対する評価を一定以上に保とうとする相矛盾した力が作用しているとみなすことができよう。

さて、評価がなされた後には、なぜそのような状態が生じたのか帰属判断がなされるだろう。すなわち、自己に生じた現象に対してそれがなぜ生じたのかその原因を推論する処理が機能するのである。その際、いかなる原因に帰属されるのかによって、問題の認識がなされるか否かが規定されることが十分推測しうるところである。たとえば、自己の行動あるいは自己の置かれている状態にネガティブな評価がなされたという状況を例にとり考えてみれば、それがもし自己の努力不足によるものだという帰属判断された場合と、それは自己の力が及ばない状況的な要因によってもたらされたものであるという帰属判断がなされた場合とでは、問題の認識の程度は異なるだろう。このように、帰属の方向性は、問題の認識に強く影響を及ぼすことが予測される。また、同時にこの帰属判断は、その問題が解決しうるものであるのかあるいは対処しうるものであるのかに関する判断でもある。たとえば、自己の行動あるいは自己の置かれている状態にネガティブな評価がなされたという状況において、それがもし自己の努力不足によるものだという帰属判断された場合と、それは自己の能力特性によるものだという帰属判断がなされた場合とでは、たとえ一時的に問題が認識されたとしても、後者の場合はやむを得ない、すなわち対処できないとの判断がなされ、認識された問題は解決不可能と判断され、解決行動に繋がることはなく、さらには問題の認識もなされなくなる可能性が強い。このように考えると、帰属判断と同時に、自己に対してどのような評価を下しているかという要因が、問題の認識を規定する重要な要因と考えることができる。すなわち、自己にポジティブな評価を下している個人は、たとえ困難な状況に遭遇したとしても、それを解決できると考え、それを問題と認識し、その解決を図ろうとするだろう。一方、自己にネガティブな評価を下している個人は、そのような状況に遭遇した場合、

それは自己にとって解決できないと考え、問題の認識さらには問題に対する解決行動はなされない確率が高いと考えられる。

以上、ここまで人が問題をいかに認識するか、その過程においていかなる処理が機能するかを考えてきた。まとめれば、次のような要因が、問題が認識されるか否かを規定すると考えられる。それは、1) 自己のいかなる側面に注意が向かうか、2) いかなる基準を個人が有しているのか、3) 周囲にいかなる他者が存在し、いかなる他者と社会的比較が行われるのか、4) 個人の自己評価維持傾向または防衛傾向がどの程度強いのか、5) 注意が向けられた自己の行動なり自己の置かれた状態がいかに認識され、それに対していかなる評価が下されるのか、6) その評価結果、その個人はどのような感情を喚起しているのか、7) 評価した対象に対していかなる帰属判断が行われるのか、そして、8) 自己に対して全体的にどのような評価を下しているのかといった要因である。このようにみれば、それぞれの要因が個人的特性と強く結びついた要因であることに気づく。すなわち、自己意識特性、個人的行動規範、自己評価維持傾向、帰属スタイル、自尊感情といった特性である。ここから、問題認識過程は、このような個人的特性の影響を強く受けやすい過程であると推測することができる。これを実証するためには、このような個人的特性と問題の認識との関係性を検証していくことが必要となるが、ただし、これらの特性間には密接な関係性なり連動性があることが十分予想される。したがって、それら特性間の関係性、さらには概念的な関係性あるいは独立性にも注意を払いながら、それらの特性が問題の認識過程にいかなる効果をもつかを検討していくことが必要となる。

そこで、本研究においては、1) 個人がいかなる基準を有しているのかと、2) 個人がどのような感情を喚起しているのか、3) 個人が帰属判断にどのような傾向を有しているのか、4) 自己に対してどのような評価を下しているのかといった要因をとりあげ、これらの特性と問題の認識との関連性を、さらにはこれらの特性間の関係を検討することを目的とする。

まず、個人がいかなる基準を有しているのかという要因に関しては、次の2つの基準を用いる。ひとつは、西迫・森上・桑原(1999)が提出している“適切さの基準”であり、もうひとつは、森上・西迫・桑原(1997)が提出している目標のリストである。西迫・森上・桑原(1999)は、最低限守るべき基準を“適切さの基準”と呼び、それがいかなる基準より構成されているのかを分析している。彼らは、まず、120名の被験者を用いて、“気をつけていること”、“心がけていること”、“これだけは守らなければならないこと”、“これだけはしななければならないこと”、“してはいけないこと”といったなかからいずれかの主題を与え、自由記述により基準を収集し、それを64項目に集約している。そして、男子大学生112名、女子大学生112名から成る計224名の被験者を用いて、この64項目の重要性を7段階で評定させ、その評定値を因子分析により分析している。その結果、Table 2に示すような、I) 共同社会の中で他者に対して最低限果たすべき責任あるいは遵守すべき行為から構成される対人的道徳性という因子、II) 個人的行動に対する個人的決定基準より構成される個人的規律性という因子、III) 集団を維持するために、また個人が集団に適応するために遵守すべき行為より構成されている組織的道徳性、IV) 個人が集団において承認

されかつ賞賛を獲得するのに必要な行為より構成される組織的承認性、V) 社会的関係において遵守すべき行為より構成される社会関係的道德性、VI) 生活に秩序をもたらす基準より構成される生活的秩序性に関わる基準という6因子を抽出している。これらは、個人が有する基準の中でももっとも下位に位置する基準であり、Higgins (1987) のいう義務自己に相当するとみなすことができよう。

それに対して、目標とは個人が有する基準の中でももっとも上位に位置する基準であり、Higgins (1987) のいう理想自己に相当するとみなすことができる。森上・西迫・桑原 (1997) が、個人がもっている目標構造を明らかにするために次のような調査を行っている。彼らは、まず、大学生78名を被調査者とし、それぞれの個人が有している目標を自由記述させることにより、301種類のプロトコルを収集し、そして、それらを78項目に集約したものを質問項目として用い、男子120名および女子120名の大学生を被調査者として、それぞれの目標を有している程度を“まったくもっていない”から“ひじょうに強くもっている”までの7段階で評定することを求め、その評定値を用いて主因子法による因子分析を行った。その結果、Table 3 に示すような、I) 自己の性格や行動をより望ましいものにしていこうとする人格成長目標、II) 対人関係を円滑にし、社会的な生活を向上させていこうとする社会的生活充実目標、III) 私的な生活をより満足なものにしていこうとする個人的生活充実目標、IV) 生活を送るうえにおいて必要な条件を充たそうとする日常生活遂行目標、V) 新たな知識や技能を獲得あるいは修得しようとする知的成長目標という5因子を抽出している。本研究においては、この目標そして適切さの基準という2つの基準を構成する項目を用いることにより、個人がどのような行動規範を有しているのかを測定することを目的とする。

次に、個人がどのような感情を喚起しているのかという要因に関しては、評価場面においてももっとも強く喚起され、なおかつ問題解決行動を生起させるうえにおいて極めて強い効果をもつと思われる不安という感情をとりあげ、現在の不安状態とその個人がどの程度不安を感じやすいのかを状態-特性不安尺度を用いて測定する。また、個人が帰属判断にどのような傾向を有しているのかという要因に関しては、内的統制型か外的統制型かをLocus of Control尺度を用いて測定しする。さらに自己に対してどのような評価を下しているのかといった要因に関しては、自己に対してポジティブな評価感情を抱いているのか、それともネガティブな評価感情を抱いているのかを自尊感情尺度を用いて測定する。そして、これらの特性間の関係と、これらの特性と問題の認識との関連性を検討することを目的とする。

Table 2. 「適切さの基準」に対する因子分析の結果 (西迫・森上・桑原, 1999)

因子	項目番号	項目内容	因子負荷量
I 対人的道徳性	36	人を差別しないこと	.714
	15	人の秘密を守ること	.660
	13	約束を守ること	.647
	37	信頼を裏切らないこと	.619
	21	思いやりを持つこと	.596
	43	人の悪口を言わないこと	.596
	22	借りた物を返すこと	.587
	32	相手の立場にたつてものを考えること	.577
	44	人に迷惑をかけないこと	.577
	50	人が傷つくようなことは言わないこと	.537
	48	ゴミを道などに捨てないこと	.517
	34	嘘をつかないこと	.510
	31	困った人がいたら助けてあげること	.469
	47	自分勝手な行動をしないこと	.441
	14	礼儀を守ること	.382
	38	他者を批判しないこと	.376
	II 個人的規律性	5	本を読むこと
17		ニュースを見ること	.613
11		勉強すること	.602
7		授業に出席すること	.585
46		授業中に私語をしないこと	.582
40		授業に遅刻しないこと	.525
3		部屋の掃除をすること	.487
18		長電話をしないこと	.464
2		新聞を読むこと	.443
35		忘れ物をしないこと	.438
30	マナーを守って携帯電話を使うこと	.406	
III 組織的道徳性	49	人から嫌われないようにすること	.654
	42	感情を顔に表さないこと	.595
	10	謙虚に振る舞うこと	.527
	33	自慢をしないこと	.471
	45	集団の和を乱さないこと	.463
	41	人を不愉快にしないこと	.449
	29	年上の人には敬語を使うこと	.424
26	レポートを提出すること	.422	
IV 組織的承認性	24	周りを楽しむこと	.666
	20	明るく振る舞うこと	.551
	9	身だしなみに気をつかうこと	.494
	23	時間を有効に使うこと	.449
	8	笑顔を心がけること	.448
	25	自分の意見を持つこと	.398
	12	運動すること	.343
V 社会関係的道徳性	16	両親に感謝すること	.913
	4	親を大切にすること	.789
	39	親を悲しませないこと	.550
	19	老人に席を譲ること	.400
	1	挨拶をすること	.388
VI 生活的秩序性	27	睡眠をきちんととること	.849
	28	規則正しい生活をする	.828
	6	食事をきちんととること	.569

Table 3. 「目標空間」に対する因子分析の結果(森上・西迫・桑原, 1997)

因子	項目番号	項目内容	因子負荷量
I 人格成長目標因子	38	自分の意見をもつ	.695
	53	強い意志を持つ	.652
	45	自分に自信をもつ	.641
	42	友人との約束を守る	.588
	44	趣味をもつ	.549
	52	心を美しくする	.548
	35	時間を有効に使う	.547
	4	責任感を身につける	.527
	29	集中力をつける	.526
	41	毎日を充実させる	.521
	34	自分のしたいことをみつける	.508
	47	行動力のある人間になる	.493
	36	うまく話せるようになる	.468
	12	思いやりのある人間になる	.445
	19	強い自制心をもつ	.412
	23	精神的に自立する	.408
	II 社会的生活充実目標因子	15	人づきあいをうまくする
46		他者から良く思われる	.731
9		異性から好かれる	.719
6		人から好かれる人間になる	.696
17		友人をつくる	.602
32		高収入の仕事に就く	.558
27		デートをする	.516
21		安定した暮らしをする	.484
13		試験の情報を手に入れる	.436
10		お金を稼ぐ	.431
18		あたたかい家庭をつくる	.409
III 個人的生活充実目標因子	43	きれいになる	.763
	50	おしゃれになる	.754
	3	スタイルをよくする	.697
	20	服を買う	.688
	48	買い物上手になる	.556
	5	おいしいものを食べる	.493
	37	金持ちになる	.417
	30	旅行をする	.415
39	住みたい場所に住む	.404	
IV 日常生活遂行目標因子	7	睡眠をとる	.749
	22	体調を整える	.646
	11	健康に気を配る	.582
	26	食事をする	.555
	31	休養する	.529
	40	親孝行をする	.472
	8	授業に出る	.467
	25	家族とうまくやっていく	.460
	14	ストレスを解消する	.447
	49	ケガをしない	.398
V 知的成長目標因子	1	知識を増やす	.602
	24	専門知識を深める	.600
	28	英語を話せるようになる	.587
	33	知的になる	.473
	2	本を読む	.471
	51	経済的に自立する	.468
	16	コンピュータを使いこなす	.371

2. 方法

(1) 被調査者

男子学生100名および女子学生100名を調査対象とした。

(2) 材料

次の6種類の質問項目ならびに尺度を用いた。第1は、行動の適切さの基準を測定する質問項目である。これには、西迫・森上・桑原（1999）が行った適切さの基準に関する因子分析において、彼らが抽出した6因子に負荷した50項目を質問項目として用いた。これは、1）対人的道徳性を測定する項目16項目、2）個人的規律性を測定する項目11項目、3）組織的道徳性を測定する項目8項目、4）組織的承認性を測定する項目7項目、5）社会関係的道徳性を測定する項目5項目、6）生活的秩序性を測定する項目3項目より構成される。

第2は、目標を測定する質問項目である。これには、森上・西迫・桑原（1997）が行った目標に関する因子分析において、彼らが抽出した5因子に負荷する53項目を質問項目として用いた。これは、1）人格成長目標を有する程度を測定する項目として16項目、2）社会的生活充実目標を有する程度を測定する項目11項目、3）個人的生活充実目標を有する程度を測定する項目9項目、4）日常生活遂行目標を有している程度を測定する項目10項目、そして、5）知的成長目標を有している程度を測定する項目7項目より構成される。

第3は、各個人が有する問題を測定する項目である。これには、森上・西迫・桑原（1999）がおこなった問題解決空間に関する因子分析において、彼らが抽出した4因子に負荷する40項目を質問項目として用いた。これは、1）性格領域問題を有する程度を測定する項目12項目、2）対人的領域問題を有する程度を測定する項目13項目、3）知的領域問題を有する程度を測定する項目8項目、4）日常生活領域問題を有する程度を測定する項目7項目から構成される。

第4は、不安を測定する項目である。これには、清水・今栄（1981）の日本語版状態-特性不安尺度を用いた。この尺度は、状態不安を測定する20項目と特性不安を測定する20項目の計40項目より構成されている。

第5は、帰属判断の傾向を測定する項目である。これには、鎌原・樋口・清水（1982）の作成したLocus of Control尺度を用いた。

第6は、自尊感情を測定する項目である。これには、山本・松井・山城（1982）の日本語版自尊感情尺度の10項目を用いた。

(3) 手続

まず、行動の適切さの基準を測定する50項目、個人の有している目標を測定する53項目、各個人が有する問題を測定する40項目に対して、それぞれの基準、目標および問題をどの程度有しているかをいずれも7段階で評定することを求めた。その後、特性不安尺度および状態不安尺度、Locus of Control尺度、自尊感情尺度に回答することを求めた。

3. 結果および考察

まず、適切さの基準を構成する項目、目標を構成する項目、そして問題解決空間を構成する項目の各項目の平均評定値を算出した。その結果は、Table 4, Table 5, Table 6 にそれぞれ示す通りである。適切さの基準を構成する項目、目標を構成する項目、そして問題解決空間を構成する項目、いずれの質問項目に関してもその平均評定値に差がみられ、また標準偏差の値も回答にばらつきがあることを示している。とりわけ、問題解決空間に関する質問項目においてその値は大きくなっている。これらのことは、個人によって行動規範が異なり、また抱える問題も個人によって異なることを示唆している。

この結果を、適切さの基準、目標、問題解決空間、それぞれを構成する因子ごとにみるために、各因子に負荷する項目をまとめ各因子ごとにそれぞれ1項目あたりの平均評定値を算出した。まず、適切さの基準についてみてみると、Table 7 に示すように、社会的関係の道徳性および対人的道徳性因子に負荷する項目に対して高い評定値がつけられている。それに対して、個人的規律性や組織的道徳性因子に負荷する項目に対しては低い評定値がつけられている。次に、目標についてみてみると、Table 8 に示すように、人格成長目標因子に負荷する項目に対して高い評定値がつけられ、一方、個人的生活充実目標因子に負荷する項目に対しては低い評定値がつけられている。また、問題解決空間に関しては、Table 9 に示すように、各因子間に顕著な差は認められない。

それでは、次に、不安、Locus of Controlおよび自尊感情と適切さの基準、目標、問題解決空間との関連性をみてみよう。まず、不安、Locus of Controlおよび自尊感情と適切さの基準との関係を見てみると、Table 10 より、特性不安の高い個人は、対人的道徳性に関わる基準および組織的道徳性に関わる基準を強く有し、状態不安の高い個人は生活秩序性に関する基準が低いことがわかる。また、Locus of Controlが内的統制型の個人は生活秩序性に関する基準が高いことがわかる。そして、自尊感情の高い個人は、組織道徳性に関する基準が低いことがわかる。次に、不安、Locus of Controlおよび自尊感情と目標との関係を見てみると、Table 11 より、特性不安の高い個人は、日常生活遂行目標を除いて、すなわち人格成長目標、社会的生活充実目標、個人的生活充実目標、知的生活目標いずれの目標も強く有していることがわかる。そして、状態不安の高い個人は個人的生活目標のみを強く有することがわかる。そして、Locus of Controlが外的統制型の個人は、性格領域における問題を強く認識することがわかる。また、自尊感情と目標との間には有意な相関関係は認められなかった。最後に、不安、Locus of Controlおよび自尊感情と問題解決空間との関連性をみてみると、Table 12 より、特性不安の高い個人は、性格領域、対人的領域、知的領域、日常生活領域、すべての領域において強く問題を認識していることがわかる。状態不安の高い個人にもこれと同じことがいえ、状態不安の高い個人は、性格領域、対人的領域、知的領域、日常生活領域、すべての領域において強く問題を認識していることがわかる。また、Locus of Controlが内的統制型の個人は日常生活領域の問題を強く認識していることがわかる。

そして、自尊感情の高い個人は、性格領域、対人的領域、知的領域、日常生活領域、すべての領域において問題を認識しない傾向にあること、自尊感情の低い個人は、性格領域、対人的領域、知的領域、日常生活領域、すべての領域におい強く問題を認識していることがわかる。

これらのことより、次のことがいえる。まず、1) 特性不安は適切さの基準を上昇させ、また目標を強く有する効果があること、2) 状態不安は、個人的な生活と強く関わりを持ち、個人的な生活を充実させようという目標を強くする一方で、生活秩序性に関する基準を低下させる効果をもつこと、Locus of Controlは、る適切さの基準、目標および問題解決空間いずれとも予測したような顕著な関係はないこと、4) 自尊感情の高さは問題の認識を阻害するということである。

次に、適切さの基準と目標空間を構成するそれぞれの因子間において、相関分析を行ったところ、Table13に示すように、全ての因子間において有意な相関関係が認められた。このことは、行動規範の上位基準が高い個人は、下位基準も高く有していることを示唆している。また、適切さの基準と問題解決空間を構成するそれぞれの因子間において、相関分析を行ったところ、Table14に示すように、ほとんどの因子間において有意な相関関係が認められた。このことは、高い下位基準を有している個人は、問題を認識しやすいこと、逆にいえば低い下位基準を有している個人は問題を認識しない傾向にあることを示している。さらに、目標空間と問題解決空間を構成するそれぞれの因子間において、相関分析を行ったところ、Table15に示すように、すべての因子間において有意な相関関係が認められた。このことは、高い上位基準を有している個人は、問題を認識しやすいことを示している。

最後に、本研究で扱った不安、Locus of Control、自尊感情という3つの特性間において相関分析を行ったところ、Table16に示すように、いずれにおいても有意な相関が認められ、特性不安が高い個人は状態不安も高いこと、特性不安あるいは状態不安が高い個人は外的統制型であること、特性不安あるいは状態不安が高い個人は自尊感情が高いこと、そして自尊感情が高い個人は、内的統制型であることが認められた。

以上、本研究においては、問題解決空間の規定因をみいだすことを目的に、問題解決空間をはじめとして、不安、Locus of Control、自尊感情、そして適切さの基準および目標という個人的行動規範、それぞれの関係性を分析してきた。その結果、不安と行動規範、不安と問題解決空間、行動規範と問題解決空間との間に強い関係があることをみいだした。しかしながら、問題の認識過程を規定すると思われる要因は、まだ多くある。これらの要因を加え、検討を重ねてゆくことが今後の課題となる。

本研究は、平成11年度関西大学学部共同研究費の助成を受けた。

Table 4. 「適切さの基準」を構成する項目の平均評定値

順位	因子	項目番号	項目内容	平均	標準偏差
1	I	13	約束を守ること	5.56	0.71
2	I	22	借りた物を返すこと	5.47	0.88
3	I	15	人の秘密を守ること	5.35	0.97
4	V	1	挨拶をすること	5.32	1.00
5	V	4	親を大切にすること	5.27	1.04
6	I	36	人を差別しないこと	5.21	1.04
7	I	37	信頼を裏切らないこと	5.16	1.06
8	I	14	礼儀を守ること	5.15	1.05
9	IV	25	自分の意見を持つこと	5.14	1.05
10	V	16	両親に感謝すること	5.03	1.19
11	I	21	思いやりを持つこと	4.97	1.07
12	I	32	相手の立場にたつてものを考えること	4.94	1.14
13	VI	6	食事をきちんととること	4.91	1.46
14	I	48	ゴミを道などに捨てないこと	4.82	1.17
15	V	39	親を悲しませないこと	4.76	1.26
16	I	31	困った人がいたら助けてあげること	4.70	1.18
17	I	50	人が傷つくようなことは言わないこと	4.66	1.31
18	IV	23	時間を有効に使うこと	4.62	1.31
19	I	44	人に迷惑をかけないこと	4.62	1.29
20	VI	27	睡眠をきちんととること	4.61	1.57
21	III	26	レポートを提出すること	4.60	1.40
22	II	30	マナーを守って携帯電話を使うこと	4.53	1.37
23	IV	12	運動すること	4.37	1.22
24	III	29	年上の人には敬語を使うこと	4.23	1.48
25	II	5	本を読むこと	4.22	1.41
26	III	41	人を不愉快にしないこと	4.19	1.31
27	IV	9	身だしなみに気をつかうこと	4.15	1.26
28	II	11	勉強すること	4.15	1.19
29	I	34	嘘をつかないこと	4.13	1.37
30	V	19	老人に席を譲ること	4.11	1.44
31	VI	28	規則正しい生活をする	4.10	1.52
32	II	7	授業に出席すること	4.09	1.36
33	II	3	部屋の掃除をすること	4.02	1.39
34	II	2	新聞を読むこと	4.00	1.35
35	I	43	人の悪口を言わないこと	3.97	1.46
36	II	17	ニュースを見ること	3.92	1.34
37	II	35	忘れ物をしないこと	3.92	1.39
38	IV	24	周りを楽しくすること	3.90	1.34
39	II	46	授業中に私語をしないこと	3.90	1.39
40	I	47	自分勝手な行動をしないこと	3.86	1.46
41	IV	8	笑顔で心がけること	3.84	1.43
42	I	38	他者を批判しないこと	3.75	1.50
43	IV	20	明るく振る舞うこと	3.71	1.40
44	III	45	集団の和を乱さないこと	3.68	1.42
45	II	40	授業に遅刻しないこと	3.63	1.57
46	III	49	人から嫌われないようにすること	3.54	1.55
47	III	10	謙虚に振る舞うこと	3.39	1.33
48	III	33	自慢をしないこと	3.32	1.36
49	III	42	感情を顔に表さないこと	2.66	1.54
50	II	18	長電話をしないこと	2.10	1.42

Table 5. 「目標空間」を構成する項目の平均評定値

順位	因子	項目番号	項目内容	平均	標準偏差
1	I	34	自分のしたいことを見つける	5.27	1.26
2	I	53	強い意志を持つ	5.21	1.22
3	I	42	友人との約束を守る	5.18	1.49
4	I	41	毎日を充実させる	5.16	1.22
5	I	38	自分の意見を持つ	5.15	1.38
6	I	47	行動力のある人間になる	5.12	1.16
7	I	23	精神的に自立する	4.92	1.25
8	I	12	思いやりのある人間になる	4.90	1.29
9	I	35	時間を有効に使う	4.89	1.09
10	V	1	知識を増やす	4.89	1.10
11	I	45	自分に自信をもつ	4.88	1.12
12	II	17	友人をつくる	4.87	1.26
13	I	44	趣味をもつ	4.76	0.95
14	I	36	うまく話せるようになる	4.75	1.38
15	I	29	集中力をつける	4.70	1.34
16	V	24	専門知識を深める	4.66	1.53
17	II	15	人づきあいをうまくする	4.64	1.26
18	II	10	お金を稼ぐ	4.63	1.28
19	II	6	人から好かれる人間になる	4.60	1.54
20	I	4	責任感を身につける	4.60	1.11
21	IV	40	親孝行をする	4.59	1.60
22	V	16	コンピュータを使いこなす	4.57	1.44
23	V	33	知的になる	4.51	1.34
24	II	18	あたたかい家庭をつくる	4.51	1.41
25	I	52	心を美しくする	4.49	1.54
26	IV	7	睡眠をとる	4.46	1.39
27	V	51	経済的に自立する	4.43	1.77
28	II	13	試験の情報を手に入れる	4.41	1.15
29	IV	31	休養する	4.40	1.55
30	I	19	強い自制心をもつ	4.39	1.11
31	III	43	きれいになる	4.38	1.54
32	II	9	異性から好かれる	4.33	1.54
33	II	21	安定した暮らしをする	4.33	1.55
34	IV	22	体調を整える	4.31	1.42
35	III	39	住みたい場所に住む	4.30	1.48
36	IV	8	授業に出る	4.28	1.49
37	IV	25	家族とうまくやっていく	4.28	1.47
38	IV	11	健康に気を配る	4.28	1.45
39	IV	26	食事をする	4.27	1.59
40	III	50	おしゃれになる	4.23	1.63
41	II	46	他者から良く思われる	4.23	1.66
42	III	48	買い物上手になる	4.14	1.94
43	IV	14	ストレスを解消する	4.14	1.32
44	III	3	スタイルをよくする	4.09	1.67
45	V	2	本を読む	4.08	1.37
46	III	5	おいしいものを食べる	4.06	1.58
47	III	30	旅行をする	4.05	1.59
48	III	37	金持ちになる	4.01	1.66
49	II	27	デートをする	4.00	1.73
50	III	20	服を買う	3.98	1.60
51	II	32	高収入の仕事に就く	3.97	1.38
52	IV	49	ケガをしない	3.90	1.67
53	V	28	英語を話せるようになる	3.83	1.46

Table 6. 「問題解決空間」を構成する項目の平均評定値

順位	因子	項目番号	項目内容	平均	標準偏差
1	Ⅲ	6	試験の準備ができていないこと	4.33	1.64
2	Ⅲ	2	授業の勉強をしていないこと	3.97	1.60
3	Ⅱ	21	自分に自信がもてないこと	3.75	1.84
4	Ⅱ	23	決断力がないこと	3.59	1.79
5	Ⅰ	13	すぐにイライラすること	3.57	2.02
6	Ⅱ	10	行動力がないこと	3.56	1.90
7	Ⅰ	36	大学生活に価値観を見いだせないこと	3.55	2.00
8	Ⅳ	16	すぐ疲れること	3.54	1.83
9	Ⅱ	18	人見知りをする事	3.53	1.71
10	Ⅲ	35	成績が良くないこと	3.52	1.87
11	Ⅰ	39	怠惰であること	3.51	1.85
12	Ⅱ	24	人前でうまく話せない	3.50	1.82
13	Ⅰ	4	無気力であること	3.47	1.94
14	Ⅲ	22	授業が理解できないこと	3.47	1.77
15	Ⅰ	26	自制心が弱いこと	3.46	1.82
16	Ⅰ	38	情緒不安定であること	3.43	2.01
17	Ⅱ	37	自分の意見が言えないこと	3.39	1.96
18	Ⅰ	5	人の気持ちがわからないこと	3.38	1.75
19	Ⅰ	7	学部の内容が期待と一致しないこと	3.38	1.86
20	Ⅱ	12	消極的であること	3.38	1.96
21	Ⅲ	32	試験に関する情報がないこと	3.38	1.76
22	Ⅳ	14	自由な時間がないこと	3.34	1.86
23	Ⅳ	1	睡眠不足であること	3.31	1.85
24	Ⅱ	15	社会的でないこと	3.27	1.79
25	Ⅲ	31	レポートの書き方が分からないこと	3.17	1.93
26	Ⅰ	9	思いやりがないこと	3.16	1.77
27	Ⅱ	40	人とうまくつきあえないこと	3.16	1.88
28	Ⅰ	8	常識がないこと	3.16	1.87
29	Ⅲ	20	知的でないこと	3.16	1.72
30	Ⅰ	30	性格が良くないこと	3.12	1.77
31	Ⅳ	27	疲れていること	3.12	1.76
32	Ⅱ	3	恋人がいないこと	3.11	2.01
33	Ⅳ	28	体調が悪いこと	3.00	1.89
34	Ⅱ	19	人から好かれないこと	2.95	1.80
35	Ⅱ	17	異性とうまく話せないこと	2.93	1.84
36	Ⅰ	33	人の悪口を言ってしまうこと	2.89	1.72
37	Ⅲ	11	新聞を読んでいないこと	2.84	1.84
38	Ⅳ	34	通学に時間がかかること	2.84	2.33
39	Ⅱ	25	人から良い評価をされないこと	2.83	1.67
40	Ⅳ	29	電車・バスが混んでいること	2.74	2.18

Table 7. 「適切さの基準」を構成する各因子の平均評定値およびその標準偏差

	対人的道徳性		個人的規律性		組織的道徳性		組織的承認性		社会関係的道徳性		生活的安全性		全体	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
男性	4.68	0.67	3.79	0.85	3.62	0.97	4.19	0.86	4.84	0.91	4.43	1.40	4.25	0.66
女性	4.86	0.75	3.93	0.87	3.78	0.89	4.30	0.84	4.95	0.77	4.65	1.16	4.40	0.69
計	4.77	0.71	3.86	0.86	3.70	0.93	4.24	0.85	4.90	0.84	4.54	1.29	4.32	0.68

Table 8. 「目標空間」を構成する各因子の平均評定値およびその標準偏差

	人格成長目標		社会的生活充実目標		個人的生活充実目標		日常生活遂行目標		知的成長目標		全体	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
男性	4.85	0.77	4.37	0.96	3.76	1.14	4.25	1.02	4.57	0.80	4.42	0.74
女性	4.94	0.82	4.45	0.88	4.51	0.91	4.33	0.91	4.28	0.98	4.56	0.73
計	4.89	0.79	4.41	0.92	4.14	1.09	4.29	0.97	4.42	0.91	4.49	0.73

Table 9. 「問題解決空間」を構成する各因子の平均評定値およびその標準偏差

	性格領域問題		対人的領域問題		知的領域問題		日常生活領域問題		全体	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
男性	3.40	1.27	3.31	1.26	3.49	1.23	3.05	1.14	3.33	1.02
女性	3.27	1.28	3.29	1.34	3.47	1.12	3.20	1.33	3.30	1.06
計	3.34	1.27	3.30	1.30	3.48	1.17	3.12	1.24	3.32	1.04

Table10. 特性不安, 状態不安, Locus of Control, および自尊感情と適切さの基準との相関関係

	対人的道徳性	個人的規律性	組織的道徳性	組織的承認性	社会関係的道徳性	生活的秩序性	全体
特性不安	.144*	.089	.217**	.009	.105	-.017	.134
状態不安	.002	-.039	.075	-.027	.046	-.141*	-.009
Locus of Control	.060	.113	.022	.190**	.087	.197**	.123
自尊感情	-.101	.000	-.192**	.085	-.067	.150*	-.053

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table11. 特性不安, 状態不安, Locus of Control, および自尊感情と目標空間との相関関係

	人格成長目標	社会的生活充実目標	個人的生活充実目標	日常的生活遂行目標	知的成長目標	全体
特性不安	.233**	.245**	.192**	.134	.139*	.244***
状態不安	.092	.129	.194**	-.021	.109	.125
Locus of Control	.068	.112	.041	.074	.082	.100
自尊感情	-.092	-.050	-.072	.055	.052	-.039

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table12. 特性不安, 状態不安, Locus of Control, および自尊感情と問題解決空間との相関関係

	性格領域問題	対人的領域問題	知的領域問題	日常生活領域問題	全体
特性不安	.431***	.460***	.325***	.291***	.480***
状態不安	.240**	.260**	.233**	.310***	.311***
Locus of Control	-.170*	-.126	-.048	-.219**	-.171*
自尊感情	-.350***	-.443***	-.344***	-.162*	-.421***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table13. 適切さの基準と目標空間との相関関係

	人格成長目標	社会的生活充実目標	個人的生活充実目標	日常生活遂行目標	知的成長目標	全体
对人的道德性	.636***	.445***	.284***	.599***	.309***	.595***
对人的規律性	.519***	.347***	.283***	.599***	.478***	.558***
对人的組織性	.607***	.527***	.391***	.548***	.265***	.581***
对人的承認性	.609***	.565**	.462***	.490***	.363***	.644***
对人的道德性	.411***	.346***	.287***	.445***	.162*	.434***
对人的秩序性	.394***	.334***	.142*	.645***	.124	.431***
全体	.675***	.544***	.395***	.706***	.395***	.701***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table14. 適切さの基準と問題解決空間との相関関係

	性格領域問題	对人的領域問題	知的領域問題	日常領域問題	全体
对人的道德性	.217**	.204**	.300***	.096	.250***
对人的規律性	.237***	.249***	.344***	.073	.282***
对人的組織性	.251***	.329***	.408***	.097	.339***
对人的承認性	.193**	.105	.287***	.125	.205**
对人的道德性	.122	.082	.230**	-.035	.123
对人的秩序性	.127	.176*	.111	.018	.147*
全体	.258***	.260***	.379***	.094	.306***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table15. 目標空間と問題解決空間との相関関係

	性格領域問題	对人的領域問題	知的領域問題	日常生活領域問題	全体
人格成長目標	.394***	.347***	.402***	.243**	.428***
社会的生活充実目標	.260***	.319***	.386***	.180*	.351***
個人的生活充実目標	.207**	.234**	.380***	.197**	.298**
日常生活遂行目標	.250***	.264***	.337***	.258***	.329***
知的成長目標	.276***	.235**	.309***	.264***	.322***
全体	.356***	.359***	.462***	.283***	.441***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table16. 特性不安, 状態不安, Locus of Control, 自尊感情の相関関係

	特性不安	状態不安	Locus of Control
状態不安	.670***		
Locus of Control	-.485***	-.431***	
自尊感情	-.637***	-.470***	.420***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

引用文献

- Bem, D.J. 1972 Self perception theory. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, Vol. 6 Academic Press. 1-62.
- Bracken, B.A. 1992 Multidimensional self concept validation : A three instrument investigation. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 9, 319-328.
- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. W.H. Freeman and Company.
- Carver, C.S. 1979 A cybernetic model of self-attention processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1251-1281.
- Carver, C.S. & Scheier, M. F. 1981 *Attention and self-regulation : A control-theory approach to human behavior*. Springer Verlag.
- Duval, S. & Wicklund, R.A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. Academic Press.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Friend, R.M. & Gilbert, J. 1973 Threat and fear of negative evaluation as determinants of locus of social comparison. *Journal of Personality*, 41, 328-340.
- Greenwald, A. G. 1980 The totalitarian ego: Fabrication and revision of personal history. *American Psychologist*, 35, 603-618.
- Higgins, T.E. 1987 Self-discrepancy : A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- James, W. 1884 What is an emotion? *Mind*, 4, 188-204.
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治, 1982, Locus of Control尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討, 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 森上幸夫・西迫成一郎・桑原尚史, 1997, 目標構造の分析, 日本心理学会第61回大会発表論文集, p.581
- 森上幸夫・西迫成一郎・桑原尚史, 1998, 問題解決空間の構造, 日本心理学会第62回大会発表論文集, p.688
- Markus, H. & Wulf, E. 1987 The dynamic self-concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, 38, 299-337.
- 西迫成一郎・森上幸夫・桑原尚史, 1999, 適切さの基準の構造, 日本心理学会第63回大会発表論文集, p.528
- 清水秀美・今柴国晴, 1981, STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版(大学生用)の作成, 教育心理学研究, 29, 62-67.
- Swann, W.B., Jr. 1983 Self-verification: Bringing social reality into harmony with the self. In J. Suls & A. G. Greenwald (Ed.) , *Psychological perspective on the self*. Vol. 2 , 33-66. Erlbaum.
- Swann, W.B., Stein-Seroussi, A., & Giesler, R.B. 1992 Why people self-verify. *Journal of Personality & Social Psychology*, 62, 392-401.
- Tesser, A. 1988 Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.) , *Advances in experimental social psychology*, Vol. 21 Academic Press. 181-227.
- Trope, Y. 1983 Self-assessment in achievement behavior. In J. Suls & A.G. Greenwald (Eds.) , *Personality perspectives on the self*, Vol. 2 Lawrence Erlbaum Associates. 93-121.
- Wicklund, R.A. 1975 Objective self-awareness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 233-275.
- Wilson, S.R. & Benner, L.A. 1971 The effects of self-esteem and situation on comparison choices during ability evaluation. *Sociometry*, 34, 381-397.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子, 1982, 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30, 64-68.
- Zuckerman, M. 1979 Attribution of success and failure revisited : The motivational bias is alive and well in attribution theory. *Journal of Personality*, 47, 245-287.